

北海道室蘭土木現業所 洞爺出張所

噴火に負けない、安心して暮らせる地域作りを住民とともに目指しています。



室蘭土木現業所
洞爺出張所長
工藤 二三夫



雑魚寝状態の避難生活を続けながら、復旧活動に取り組んだ職員たち

2000年3月31日、午後1時10分ころ…、有珠山が23年ぶりに噴火しました。27日から火山性の地震が増加し、低周波地震も発生するようになったので「いよいよくるのか」と地域の住民をはじめ、関係機関の間でも徐々に緊張が高まり、専門家も「数日中に噴火の可能性がある」と発表。地割れや亀裂が確認され、31日、西山西麓から噴煙が上がりました。噴煙の高さは最高で3500メートルにまで達し、翌日の4月1日には有珠山北西側にある金比羅山西側山麓で新たな火口群が形成されました。

災害対策本部が設けられ、各関係機関がそれぞれの分野で対応に当たり、1日も早い復旧を目指し1年以上経った現在も努力を続けています。そうした中、虻田町にある室蘭土木現業所洞爺出張所も、ご苦勞の多い毎日が続いています。洞爺出張所の管轄は伊達市、虻田町、豊浦町、壮瞥町、洞爺村、大滝村の1市3町2村。まさに今回の被災地域を管轄し、出張所自体も一時避難をしていました。

「噴火前からパトロールの回数を増やし、万が一に備え職員が交替で泊まり込みました。31日に噴火した段

階で、ここも危険であるという判断から最初は豊浦町に避難し、4月3日には伊達市内に宿泊も兼ねた施設を確保。資料など必要なものを全てもってくるわけにもいかず、不便な状態が続きました。最終的にこの出張所に戻って来たのは10月末でしたから、仮の事務所での仕事が7カ月に及んだというわけです。即対応できるように、職員は家族と離れそこで寝泊まりすることになりました。約40人が同じ釜の飯を食い、プライベートな時間もない雑魚寝状態の合宿生活。誰かが風邪をひけばまん延するおそれがあるので、健康管理にはずいぶん気を配りましたね」

そう話す所長の工藤二三夫さんは、昨年4月1日付けで洞爺出張所の所長を命じられ着任と同時に避難生活が始まりました。

無線を使った「有珠山方式」の無人化施工で泥流対策

噴火の時期がちょうど冬の除雪と夏の維持管理の境目に当たりました。降灰で道路に灰が積もっていると車がスリップし、さまざまな活動の障害になるため灰を除去することが第一の仕事。しかし、散水車はまだ除雪装置が付いたままで作業ができず大苦勞。そこで急

きょ民間のタンクローリーをリースしました。風向きの関係で温泉街の降灰が多かったようですが、それでも数センチ程度で前回から比べるとかなり少なく、散水車で水を流せる程度だったようです。後日、洞爺湖登別線などはグレーダやショベルなどを使った降灰除去作業が行われました。

避難所での生活が長くなると住民から「家に1度戻って様子を見てきたい」「もってきたい手回り品があるので、家に行かせてほしい」という声が出るようになり、役場でも短時間であれば一時的に帰宅できるよう配慮しました。そうすると住民が帰る道の降灰除去作業は不可欠。「明日まで」「2日後にはきれいに」という要望があったので、敏速に 대응しています。雨が降った後は屋根に積もった灰が道路に落ちてきて、それを除去する作業も必要でした。

歩道の盛り上がりや落石のほか、港や橋、砂防ダム、護岸などあらゆるところに亀裂が入り、補修が必要な件数はかなりの数にのぼりました。ブロックの布設やコーキングなど状況に合わせた対策工事が行われています。

また、前回の噴火では泥流災害で痛ましい事故が起こっているだけに非常に神経を使いました。一般国道230号と平行して虻田町市街地に流下する板谷川の上流部に大量の降灰や噴石がもたらされ、こうした堆積物が泥流となる恐れがあったため板谷川低地沿いに大型土のうを設置し、泥流の監視機能を強化する目的で監視カメラや雨量計も設置。

このほかの場所でも泥流対策が行われていますが、噴火口が近く人が近寄れないような場所については無人化施工が行われています。平成2年長崎県雲仙・普賢岳の噴火を契機に開発されたもので、長野県小谷村の蒲原沢などで使用実績を重ねてきたものです。ただし、これまでは遠隔操作システムが可能でしたが、虻田町周辺の場合、建物や樹木で電波や視界が遮断されるので、ダイレクトで無線機械を操作する「有珠山方式」を用いています。無線によって掘削用のバックホ

ウや運搬用クローラダンプなどが動き、操作する人もほかの被災地で担当した経験者を配置しました。安全に施工できるメリットはありますが、有人運転に比べ作業効率が劣るなど問題点もないわけではありません。

住民も観光客も安心できる、安全度の高い施設環境を整えたい

現在、洞爺出張所は44人の職員が在籍し、噴火後に防災係が設けられました。通年の通常事業と平行して今回の復旧事業という2本柱で運営し、本当に忙しい1年。管理職は所長と次長の二人だけなので、時期が時期だけに何か問題が発生した場合どちらかが必ずいなければならないため、所長も次長も休みはあって無いようなもの。慣れない避難生活で職員のストレスも極度にたまっていることから、職場のまとめ役となる工藤所長も心労が絶えなかったことでしょう。

工藤所長は函館の出身で、小樽をかわきりに札幌、網走、稚内、帯広など道内各地でキャリアを重ね、特に河川の仕事に携わることが多かったそうです。

「小樽にいたとき、高島という地域に急なガケがあって、崩れやすく危険なので岩盤を取り除く作業をしました。若いころの仕事なもので、今でも思い出に残ってるんですよ」と工藤さん。

現在、函館に家族を残し単身赴任。

「掃除に洗濯、食事の支度など身の回りのことをされるのも、けっこう大変なのでは？」とかがうと、「以前にも経験があるので、慣れるとけっこうやれるものです」とサラリと笑顔でかわします。

北から南まで、日本は火山列島といえるほど火山の多い国です。「美しい景色を楽しみ、のんびりと温泉に入ることができる反面、今回の災害で自然は優しさとしがさが背中合わせになっていることを思い知らされました」という言葉に、「だからこそ住民の安全を守り、観光客の方も安心して利用できる環境を整えることが大事なんです。そのためにも、より安全度の高い施設を作っていくつもりです」と工藤所長は熱っぽく話してくださいました。

被災にあわれた方皆さんが、少しでも早く前とかかわらぬ生活を取り戻せるよう心からお祈りします。

(平成13年3月6日取材)

